



サハラ砂漠のキャラバン・ルート：その歴史的展望 (中世)

南里, 章二

(Citation)

兵庫地理, 36:1-21

(Issue Date)

1991-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002371>



サハラ砂漠のキャラバン・ルート

—その歴史的展望（中世）—

南 里 章 二

「商業の何たるかをわきまえている商人は、金持ちも貧者も、支配人も人民も必要とするような、即ち莫大な需要がある商品を輸送する。（中略）商品を遠方の、しかも道中の危険な土地から輸送すれば、商人は莫大な利益、巨額の利潤を得ることが出来、市場の変動においても、より有利な保証が得られる。輸送された商品は、その産地が遠隔であり、道中の危険が伴うために、わずかしがなく、それをもたらす人もまれである。商品がわずかで少ない場合、価格は騰貴する。一方土地が近く道中が安全であれば、輸送する者も多い。そこで商品は過剰となり、価格は下落する。したがって、あえてスーダンの国へ入る商人は人々のうちでもっとも富裕である。彼らが旅する距離と道中の苦難は計りしれないし、恐怖で近づきがたく、飢渴の危険を伴う苦しい砂漠を横切らねばならない。水は隊商案内人が導くわずかの地点にしか発見出来ない。この道の危険や距離をものともしない者はごくまれである。それでスーダンの国の商品は当地ではわずかしが見られず、きわだって高価である。同じことはスーダンの国におけるわれわれの商品についてもいえる。」

イブン・ハルドゥン 『歴史序説』より

1 中世サハラ長距離交易の揺籃

—ターヘルトとガーナ王国—

661年にマホメットの正統後継者から、カリフ権を奪ったムーアウィアが興したウマイア朝は、半世紀を待たずして、スペイン・北アフリカからインダス西岸に至る東西に長く伸びた空前絶後の大帝国を実現することになる。西側への拡大として北アフリカ征服の先陣を切ったウマイアの武将オクバ・ベンナフィが、この征服の第一歩として、カイロワンの町を建設したのが671年のことであった。彼らイスラム教徒が、スーダンからもたらされた豊かな金の存在をカイロワンの東、スースで確認したのは、その10年後の681年頃とされる。¹⁾

カイロワンはやがてウマイアの第5代カリフ・アブドル・マリク（在位685～715）の統治下におかれ、710年にイスラム軍がベルベル諸部族の根強い抵抗を排除しつつ、北アフリカ全域を征服し終えるまでの根拠地としての役割をはたすことになる。

このカリフ、アブドル・マリクの名と肖像が刻印されたマンクスと呼ばれたモスリムの金貨の鑄造は、その統治下694年頃に始まり、ヨーロッパのキリスト教国にまで、流通域を拡げていた。²⁾ スーダンからもたらされた金がこの鑄造に用いられたかどうかは明らかではないが、この時点以降、急速にサハラ砂漠縦断の交易路の基地が建設され、交易網の整備が進められていったことを考え合わせると、この頃、すでに、多大な経費と時間と労力を必要とする金の輸送に、充分見合うだけの金の存在が確認され、それを裏付けに足りる量の金が、すでに北アフリカにもたらされていたことは想像に難くない。

スペイン系アラブ人、コルドバの地誌家アル・ベクリはヘジラ127年（745年）にイフリキアの統治者アブデル・ラーマン・イブン・ハビブによって、シジルマサに三ヶ所の井戸が掘られ、街づくりが進められ、サハラ縦断遠征の出発拠点としての基盤がつくられたことを記している。³⁾

シジルマサはタフィラルト、ワディ・ジズの左岸に位置する町であった。アル・ベクリによれば⁴⁾砂漠の入口に位置し、8世紀から10世紀にかけては、ベルベルの国の首都の役割を果たし、ハリジット派の分派スフィト派の主義を奉ずる首長が10世紀半ばまで統治を続ける。このシジルマサはこの後数世紀にわたってサハラ砂漠のキャラバン・ルートの重要拠点としての地位を守り続けることになる。

750年、ウマイア朝を倒して、カリフの座を奪取したアッバース朝の軍隊が761年から762年にかけて、中央マグレブに進出し、ベルベル諸部族を

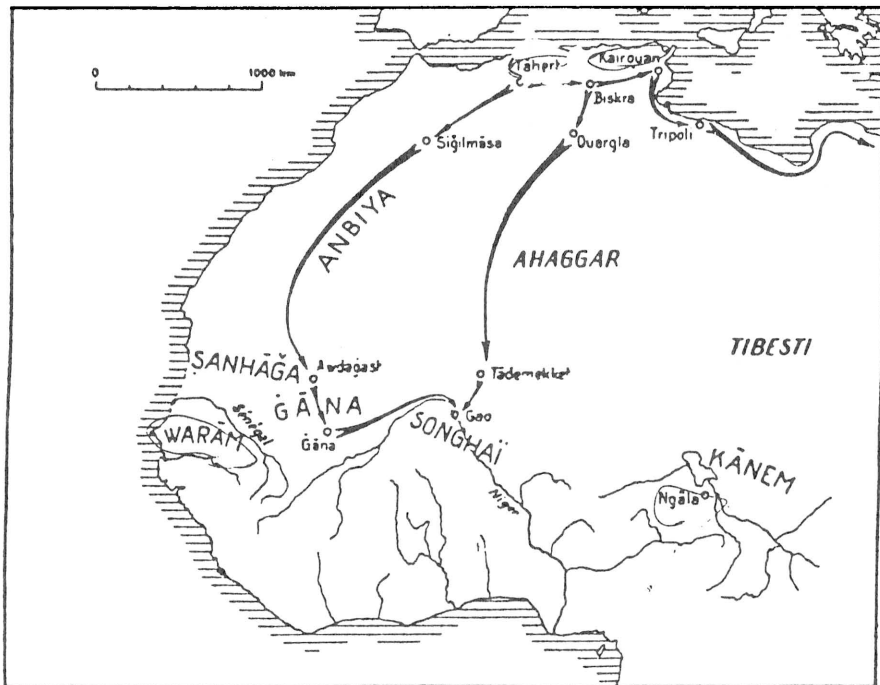
追い払い、カイロワンを包括する地域を、その支配下に治めた頃、このシジルマサとつながる都市ターヘルトが、アッバースの軍を避けたイバート派（イスラム改革主義）のベルベル系部族の政治・宗教の中心地として、にわかに活気を帯びはじめる。イバート派のベルベル族は、カイロワンのアッバースの支配から独立、もしくは半独立の立場を守り、ターヘルトの他にもナフサ、ハウワラ、ザワーなどの都市が、同様の状況下で成長した。⁵⁾ターヘルトはルステミド朝2代目イマーム、アブデル・ラーマン・イブン・ルスタン（在位776~780）の時代、急速に発展し、商業路が東西に、そしてシジルマサ、ワルグラをそれぞれ経由する2本のルートが、西スーダン方面と伸びていった。このモスリムの時代、西スーダンとマグレブを結ぶサハラ砂漠のキャラバン・ルートについての最も古い情報は、このターヘルトと西スーダンを結ぶものである。⁶⁾（図I参照）

ターヘルトの町には、ベルベル系諸部族だけではなく、カイロワン、バスラ、クーファなどからのイスラム商人、ビザンチンの流れをくむキリス

ト教徒たちも、その商業的繁栄に魅せられて集ってきた。⁷⁾このターヘルトを統治したルステミド王朝と、シジルマサのスフリト派の首長は、その主義の違いにもかかわらず、その関係は友好的であった。この二つの王朝は、8世紀末から9世紀初めまで婚姻を媒介とした同盟を締結し、⁸⁾アル・ベクリによれば、その後も永らく、この同盟は維持された。⁹⁾西スーダンを往来する商人は、必ずシジルマサを通過せねばならなかったもので、ターヘルトと共に、この二つの町はこの時代北アフリカと西スーダンを結ぶ商業に大きな役割を演じたことは疑いない。

ターヘルトの商人たちが目指した西スーダンの国とは、この頃政治的統合を進めつつあったガーナ王国であった。8世紀のアラブの地理学者アル・ファザーリは743年頃「ガーナという黄金の国」をアラブの遠征軍が攻略したことを記している¹⁰⁾ので、750年にウマイヤのカリフを倒してバクダッドに興ったアッバース朝にも、そのガーナの存在が知られていたことは十分に考えられる。またイブン・アス・サジュールは780年頃のガーナ王国へ

図I 9世紀頃ターヘルトとガーナ、ガオを結んでいたサハラ長距離交易ルート



(T.LEWICKI : L'État nord-africain de Tāherī et ses relations avec le Soudan occidental à la fin du V^{III}^e et au IX^e siècle 1962より)

向かうサハラ長距離交易の出発点がターヘルトであったことを記している。¹¹⁾

アル・ファザリーから100年程おくて、アル・ヤクビーはkitab-al-Buldān (891～892頃) に、この西スーダンの領域が、多くの王国に分割され、ガーナに隣接した大きな国家としてカウカウの名を上げている¹²⁾。これは、1353年にこの地を訪れたイブン・バトゥータが記したガウガウと同一のものであり、¹³⁾ ソンガイ族の政治的中心であったガオとも同一視してさしつかえないであろう。このガウガウ(ガオ)はガーナ王国と密接なつながりをもった王国であり、9世紀初めにはターヘルト及び、マグレブのアラブ商人の関心をひく、サハラ交易の一大センターであったことは疑いない。

このターヘルトとガーナ、そしてガオを結ぶ二つのルートが初期のサハラ交易の主要ルートであった。その一つはターヘルトからシジルマサを経て、アウダゴーストへ、そしてガーナ、ガオを結ぶルートであり、もう一方はターヘルトからビスクラ、ワルグラを経てサハラ中央部を縦断し、タデメッカを経てガオに至るルートである。このルートの大部分は古代の戦車ルートと重なり合う。前者は先述のkitab-al-Buldānによれば、ターヘルトからアウザカという町まで3日、さらにシジルマサまで7日、すなわち計10日を要し、¹⁴⁾シジルマサからアウダゴーストへは10世紀のアル・ムハラビによれば、砂漠をわたって40数日の距離であるという¹⁵⁾。アウダゴーストは、砂地の平原にあり、周辺に草木の少ない山地があり、庭園とナツメヤシに囲まれ、多くの旅行者を引き寄せる美しい市場があり、住民はモスリムであるという。961年から971年にかけてはティヤルンタンという名の王が、ベルベルのサンハジャ族を統治し、アラブとベルベルからなる富裕な多くの人口を有していたという。¹⁶⁾

アウダゴーストからガーナまでは10日、すなわちターヘルトからガーナまで、ほぼ60数日の旅である。¹⁷⁾ガーナの町はアル・ベクリによれば、二つの首都にわかれ、その一つは12のモスクを有するモスリムの商人の町であり、もう一つは王都であり、王の宮殿を有していたという。¹⁸⁾またテンカミネンという王は、弓矢に固めた者4万、20万人の兵を戦野に送ることが出来たといわれる。そして、「この国に入るロバ一荷物分の塩ごとに1

ディナール(金4.25g)、国外に出る塩一荷ごとに2ディナール、銅一荷には5ミトカル。雑荷一荷に10ミトカルの税が」¹⁹⁾かけられた。ガーナ王国の軍事的商業的大国ぶりを示す有名な記述である。

イバード派の伝記を著したアド・ダルジニは、ターヘルトの3代目のイマーム、アフラー・イブン・アブドル・ワッハブの王子が、動機は不明であるが、9世紀初めにガオへの旅を計画し、その下見にターヘルトの商人を仕わたと記しているが、それはおそらく、先述の前者のルートがとられたものと思われる。²⁰⁾イブン・ハウカルも、アウダゴーストのサンハジャの王が、この時代ガーナ、ガオの王と関係を維持し、シジルマサ・ガーナ、ガオを結ぶ商業ルートの発展に大きく寄与したことを記している。²¹⁾さらにターヘルトのルスティミド朝のイマームの権威は西のワルグラのイバード派に及び、ここからもう一つのサハラ縦断交易ルート、すなわち先述の后者のルートが南へ伸びていた。²²⁾ターヘルトの王国が909年、ファティマ朝の軍隊に征服された時、最後のイマーム、ヤークビ・イブン・アフラーが亡命したのはこのワルグラであるが、このオアシスの基盤は、ルスティミドのイマームの統治下に築かれたと考えられよう。ワルグラはその時代、南イフリキアのトゥゾールからシジルマサを結ぶ東西の交易路の途上の宿营地として発展した。²³⁾1068年にこのルートに沿って砂漠を歩いて渡ったアル・ベクリは、ワルグラから、アドラル・デ・ジフォラス山地にあるタデメッカまで50日を要した。²⁴⁾タデメッカのまちの住民は、主としてベルベル部族で、モスリムであり、彼らの衣服は赤い綿でつくられ、王は赤いターバンに黄色のトルコ服、青いズボンを身につけていた。またシャウベスと呼ばれる刻印されていない、純金のディナール貨が用いられ、住民は肉・ミルク・穀物などの食糧品を多く必要としていた。²⁵⁾この町は北アフリカとガオを結ぶルート上にある重要な商業センターであり、定期的な市が開かれ、北や南からもたらされた商品と家畜を交換しにやってくる多くの遊牧民を集めていた。²⁶⁾

アル・ベクリはガオの町で貨幣として、タウタクの塩山からの塩板が用いられていたことも記している²⁷⁾が、この塩板の輸送は必ず、タデメッカの町を通過せねばならなかった。

このタデメッカから、南に位置するガオまでは9日の距離である。²⁸⁾すなわち、ワルグラからガオまでの砂漠のキャラバン・ルートを踏破するには、ターヘルト〜ガーナのルート踏破に要する日数とほぼ同じ60日前後の行程である。

9世紀後半には、ガオの王はターヘルトのルスティミド朝のイマームと政治・経済的同盟を結び、またシジルマサのイマームとは、政略的結婚を通じて商業関係の組織化をはかった。²⁹⁾この頃には、西スーダン、マグレブ、さらにエジプトにまで至るサハラ長距離交易の主要路はガオの王の手に掌握されていたのだろう。

9世紀後半から10世紀半ばにかけては、この頃すでに商業活動に熟練したベルベル諸部族による塩の組織的な輸送が行なわれはじめた。この塩はよく北から南へもたらされる主要商品としてとらえられることが多いが、ここではR・マニに従って、この商品を北から南への長距離交易の商品項目としてでなく、北から南への地域間商業の主要商品として、位置づけて検討してみよう。

西アフリカでは、日常生活に必要な食糧の購入のために定期的な市があり、ここで地方特有の商品との物々交換(T r o c)が行なわれていた。³⁰⁾14世紀半ばにマリを訪れたイブン・バトゥタはワラタで塩片、装飾用のガラス細工、香辛料としてのクローブ(丁子のつぼみを乾かしたもの)と、ミル、ミルク、チキン、小麦粉、米などが交換されていることを記しているし、³¹⁾カダモストも、綿、布地、野菜、オイル、ミル、木の容器、ナツメヤシの葉のゴザなどが、固定された交換率に従って取引されていたことを記している。³²⁾

日常生活に必要な不可欠な塩が、地方的生産物の代償として、定期的に開かれる市に、商品として登場する。またこの地方の市場が商取引の連鎖のすべての出発点であり、それ自体が、地中海から砂漠をわたってやってくる。ある地方の生産物の一大商業センターとなっていくことも極めて自然な成行きであった。³³⁾

アウリルやイジル、タゲザ、カワルなどの塩山から掘りおこされた塩が、主としてアラブ・ベルベル系の商人の手で、布、銅、真珠、カウリス、デーツなどの商品と共に、砂漠を越えて南へ運ばれ、サヘル世界でヤギ・ロバなどの家畜や乾燥魚などが加わり、複雑な交換体系をつくりあげ、さ

らに森林帯の黒人世界に運ばれ、金やコーラと交換されていく。これらの商品の交換が、主として砂漠とサヘル、サヘルとサバンナ、サバンナと森林帯の交錯点に存在する市場で行われることになる。³⁴⁾

アウリルの塩をめぐる資料は殆どないが、この塩はセネガル川沿岸地帯の住民にもたらされ、南からやってきた金と取引されていたという。³⁵⁾イジルの塩山は少なくとも15世紀以前より開発され、4枚の塩板が一頭のラクダの背にのせられ運搬されていたという。³⁶⁾このイジルの塩の一大商業センターがウアダンで、ここで積み変えられたものがテシトに運ばれ、価格は2倍にはねあがり、さらにワラタからトンブクトゥにもたらされたという。北のタゲザからの塩が合流するトンブクトゥでは塩の荷とラクダを一緒に100〜120ミトカルで売られていた。³⁷⁾有名なタゲザの塩の採掘は、アル・ベクリによれば、少なくとも11世紀以前にはじまり、アラウアンのベルベル・メスーファの奴隷によって行なわれ、やはりラクダ一頭あたり4枚の塩板を運搬し、約20日間のキャラバンでトンブクトゥに到着し、さらに30日間の旅でマリに着いたという。³⁸⁾これらの塩の良質な部分は、一部ジェンネに運ばれ、ジェンネの商人が、この塩板を大きなピログに乗せ、ニジュール河を14日間下って、ビトウ(黄金海岸)やボンドゥクゥの金と交換されたという。³⁹⁾またカワルの塩は、特にハウサの国やボルヌー方面にもたらされていたという。⁴⁰⁾こうして塩は、北から南への地域間商業の主要商品として、サハラ砂漠のキャラバン・ルートに登場し、組織的な輸送が行われはじめ、10世紀半ば頃までには、この後何世紀にもわたるサハラ交易のコンセプトである塩金交易の固い基盤⁴¹⁾がつくり上げられたと考えて差し支えないだろう。

2 「スーダンの金」、「モスリムの金」

—イスラム世界の経済的優位の時代のはじまり—

第1章で述べたように、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを通して、北から南へと運ばれた地域間商業の主要商品は、塩であったが、南から北へと地域間商業をも内含した長距離交易の主要な商品として、輸送されていたものは、いうまでもなく「スーダンの金」である。ガーナ王国は、その南に広がる森林地帯から産出する金の仲買交易に

よって繁栄し、またこの繁栄を守るため、国内の交易ルート of 安全を確保し強大な軍事、統治機構を整備することによって、大発展をとげることが出来た。⁴²⁾ アラブ、ベルベル諸部族の人々の手を経て、北アフリカへもたらされた「スーダンの金」は、イスラム世界の東西への拡大に伴う大商業の発展をうながすことになる。ウマイヤ朝に続いておこったアッバース朝の都バグダッドには、その最盛期、メソポタミア全域、イラン平原から中央アジア、さらにはインド、東南アジア、中国、北欧を含めたヨーロッパなどからも数知れない富が集まってきた。この「スーダンの金」がそれに携わるイスラム商人の強力な武器であり、この金で得る強い経済力が大商業の動因であったことは間違いない。ここではサハラ長距離交易を支えた金の需要をつくりだしたイスラム世界と他の地域との金を軸にした関わりを眺めてみよう。

中世前半の経済史のなかで「モスリムの金」の演じた役割について論じたM・ロンバルドは、「スーダンの金」が大量にイスラム世界にもたらされる以前、すなわちモスリム征服前の同地域の貨幣のバランスを次のように整理している。まず東の高価品（布・香料・ゼイタク品）を購入し続けた西ベルベルの世界では、金は涸渇状態で、金貨のかわりに銀貨が出回っていた。商業的衰退期にあったビザンチンでは、アウレリアヌス帝時代に吸収されていたエジプトとシリアに、金が蓄積されていたものの、供給状況は悪かった。ササン朝ペルシャには、アケメネスの宝として蓄積されていた金は、膨大な量に上っていたが、流通していた貨幣は主として銀貨であった。⁴³⁾ またJ・デュプレシィによれば、ヨーロッパでは7世紀に金が涸渇し、8世紀半ばには、カロリング朝統治下の西ヨーロッパの一部では、13世紀に至るまで金貨の製造が中断されていたという。⁴⁴⁾ これらの状況は、8世紀初め、北インドからアンダルシアにまたがるモスリムの征服が完了し、イスラム世界の成立と共に大きな変化を見せはじめる。モスリムはメソポタミア、ササン朝ペルシャ、エジプト、シリア方面では、ペルシャの宮殿、古代エジプトのファラオの宝、ビザンチンのギリシャ正教修道院に蓄えられていた膨大な量の金を種々の戦利品と共に収奪した。また貨幣価値の低下したビザンチンの貨幣ノミスマ、またこれと交換率の確定し

ていたササン朝の貨幣ディルハムをディナールとして再度流通を回復することをも試みる。⁴⁵⁾

8世紀末にはマンクスと呼ばれたイスラム世界の貨幣は、西ヨーロッパ諸国へも浸透していた。⁴⁶⁾ これらのディナールやマンクスの呼称で知られるイスラム貨幣は、アッバース朝の首都バグダッド、後ウマイヤ朝の首都コルドバよりモスリム商人によって放射状に世界へ拡散していった。⁴⁷⁾ この頃時期を同じくして、サハラ砂漠の南方から「スーダンの金」が大量に北アフリカへもたらされはじめた。その初期には大量の金が、どこで、どのくらい、金貨として製造されたのかは、必ずしも明らかではないが、この新たに導入された金が、この動きを倍加させたことは疑いない。まさにイスラム世界の経済的優位の時代が始動していくことになるのである。

9世紀には、前代に貯えられていた金と「スーダンの金」という二つの源泉をもつ「モスリムの金」を基に製造されたイスラムの貨幣はイベリア半島や地中海経由で、西ヨーロッパすなわち通商関係を結んでいたカロリング朝フランク王国へ、さらにロシアの川を通過して、北・東ヨーロッパへもたらされる。⁴⁸⁾ この頃流通していたかなりの量のアラブの貨幣が、ロシア、スウェーデン、ノルウェー、デンマークで発掘されている。⁴⁹⁾

10世紀頃には、ヨーロッパへもたらされた貨幣は、さらにベネツィアなどの商人の手を経て、ビザンチンへと還流する。その為一時期商業的に衰退していたビザンチンの商業経済は、9世紀後半には復興する。バシレイオス帝時代（976～1025）、北はドナウ川、西は南イタリア、東はアルメニアに至る広大な領土を有した10世紀から11世紀にかけて、それは非常に顕著なものとなる。南ロシアからスカンジナビアに至る東と北の、中世半ば以降の経済的覚醒（例えばハンザ同盟諸都市の繁栄など）と、ビザンチンの経済復興は、まさに「モスリムの金」なくしてはありえなかった。⁵⁰⁾

「モスリムの金」はアラブの航海術の発展により、ペルシャ湾よりインド洋に進出し、セイロン、アフリカ東岸からマダガスカル島へと、モンsoon圏の商業世界とのつながりをも明白なものとし、さらにイラン、中央アジア方面にもその拡大の一途をたどる。9世紀半ばには、メソポタミア、イランでは金本位制が確立する。⁵¹⁾ 10世紀から11世

紀初めにかけては、「スーダンの金」は、後ウマ
イア朝の首都コルドバにもたらされ、アンダルシ
アではディナールの活発な鑄造がはじまった。ま
た11世紀には、パレルモに進出したモスリムによ
ってタリンと呼ばれる金貨が大量に鑄造され、⁵²⁾主
として、商業活動の盛んなイタリア諸都市へと伝
播していった。⁵³⁾ベネツィアではドウカートが、
フィレンツェではフローリンなどの金貨が、13世
紀頃から本格的に鑄造され始め、やがて地中海市
場に大きな影響力をふるいはじめる。

「モスリムの金」は、16世紀以降アメリカの金
と銀がスペインに到着するまでの間、ロシア、北
東のヨーロッパの経済を覚醒し、ビザンチンを経
済復興させ、インド洋、中央アジアの商業圏とも
つながりを確立し、西ヨーロッパ、とくに italia
諸都市の商業にも、大きな刺激を与え続け、イス
ラム世界の経済的優位の時代を築き上げたので
あった。サハラ砂漠のキャラバン・ルート上の商
業の発展は、この「モスリムの金」の拡大発展と
の相乗作用としてとらえられよう。

3 中世サハラ長距離交易の展開

ーイフリキアの盛衰ー

サハラ砂漠の北側では、10世紀に入って支配力
の衰えたアッバース朝にかわって、エジプトを中
心にファーティマ朝が大きな勢力を示しはじめる。
この新王朝ファーティマは、シーア派の分派イス
マイリを奉ずるウバイドゥッラーがイフリキア
(チュニジア) 方面で信徒を集め、アグラブ朝を
倒した909年をもってその創始とされる。ウバイ
ドゥッラーの統治下にカイロワンに入城し、東マ
グレブすなわちイフリキアを占領し終えたこの新
王朝は、その息子アル・ムイッズの時代にエジプ
ト進出をもくろみイフリキアを、中央マグレブの
ベルベルの一派サンハジャから出たジリッド家に
その統治権を譲渡している。⁵⁴⁾エジプト支配に重
点をおいたファーティマ朝が、イフリキアの統治
に対する関心が薄れるのに伴ってジリッド家はイ
フリキアの首長としての立場を主張しはじめ、10
48年にはファーティマ朝のカリフと断絶し、バク
ダッドのカリフとのつながりを深めていこうとす
る。ジリッド朝は、西はその同じサンハジャ家系
から出たハマニデス朝に占領されたものの、カイ
ロワンを首都として、その商工業の中心地として

の機能を維持させ、イフリキアを中心にサハラ砂
漠のキャラバン・ルートへの目を光らせ続け、ガー
ナ王国との交易の主導権を握りはじめる。とくに
2代目の首長アル・マンスール・バーディスは、
そのキャラバン・ルートのネットワークをよく把
握し、キャラバンの往來の頻繁な地方の市場でも、
そのキャラバンに対して貢納金などを課し、その
利益を吸収しようとした。⁵⁵⁾10世紀末には宮殿建
設に着手し、ファーティマのカリフに対しても、
毎年金貨800,000ディナールの寄進を続け、友好
関係を復活し⁵⁶⁾スーダンよりもたらされた奴隷を
主体とした軍の編成も手がけた。この裕福な財政
状態は、サハラ砂漠を越えてもたらされる交易に
よる利益をぬきにしては考えられない。しかし、
これらの利益を独占しようとする特権階級と、都
市部の商人階級との対立が、内紛状態にまで発展
し、幾つかの悲惨な虐殺、略奪事件が勃発す
る。⁵⁷⁾11世紀半ばには、首長による祭事への浪費
なども重なり、政治的にも経済的にも衰えを見せ
はじめた頃、ヒラリとよばれるエジプト方面から
のベドウィン部族の米襲を受け、カイロワンの周
辺を占領される。このヒラリの米襲に伴って、カ
イロワンにつながるサハラの交易ルートが切断さ
れ、「スーダンの金」も大量に略奪された。しか
し従来、カイロワンに対して壊滅的打撃を与えた
と考えられていたヒラリの米襲に関して、J・ポ
ンセはカイロワンの没落はむしろ、それに先立つ
カイロワンの政治的・経済的崩壊に重点的原因があ
ると論じている。⁵⁸⁾カイロワンは永らくイフリキ
アの商工業センターとして発展してきたが、この
町の存在自体が主として周辺の農業生産に依存し、
とくに11世紀半ばまでは、この農業の発展によ
って、政治・経済・文化の諸側面において、大都市
として繁栄してきた。⁵⁹⁾しかし、先述のようなジ
リッド朝の内紛・衰退による国家の不統一は農業
生産にも悪影響を及ぼし、それに間接的にせよ関
わりの深い遊牧民も、経済的繁栄期にはそれを支
え、側面から育成する役割を果たしていたのに、
経済的下降期には、破壊的活動に転ずる。この状
況の変化に対応して、交易に関しても従事から略
奪へと立場を変える。⁶⁰⁾

南から北へのサハラ交易の主要商品である金は
贅沢品として唯一最高のものであり、この金をめ
ぐる需要関係が交易の状況を大きく動かしていた

ことは疑いないが、この金の取引に伴う都市と農村の生活を支える農産物、その他をめぐる需給関係、それに関わる、ヒラリ、或はそれに先立つ遊牧民の活動が、サハラ交易のネット・ワークを縦横に変化させる動因になっていたことも確認しておかねばならない。⁶¹⁾

また先にも述べたように、980年頃、イフリキアには、白人、黒人からなるアビドと呼ばれる奴隷の軍隊があったことをアル・ベクリが記している。⁶²⁾ このアビドの大部分は、中央スーダンから、フェザンのザウィラ経山でイフリキアにもたらされたもので、大多数は少年期より訓練を受け、やがて、首長の親衛隊に編入されたという。イフリキアがサハラ交易に関わる重要な要素としての奴隷交易が、この頃組織的に行なわれていたのである。⁶³⁾

また10世紀前半、ファーティマ朝の軍隊によって、中央マグレブから追いたてられたイバード派ベルベル系部族は、サハラを南下し、ジェリドをその中心地とし、東方にはジャベル、ナフサを控え、南のワルグラ、ザウィラなどの重要な交易センターを築き、それを占有していた。これらのオアシス都市は、輸出用のデーツの生産に力を入れ、ジャベル、ナフサの毛織物と共に、イバード派の商人たちは、タデメッカからニジュール湾曲部へのルートにおいて独占的にその輸送に携わった。⁶⁴⁾ このイバード派の商人たちは、奴隷の輸送にも携わり、彼らの田園的・共同体的な連鎖はカイロワンにも及び、金や奴隷のためばかりでなく、デーツや布などの取引を通して、新しい需要の伝達を可能にする柔軟なメカニズムをつくり出した。⁶⁵⁾ やがてこのイバード派の商人たちは、ファーティマ朝の保護を受け、時にはファーティマの代理人として活動し、交易ルートを開拓し、植民を続け、イフリキアの経済とサハラ交易を結びつける重要な役割を担っていく。⁶⁶⁾ この頃のサハラ砂漠のキャラバン・ルートは西のシジルマサーアウダゴーストのルートにかわって、ワルグラ、ジェリドからタデメッカを経て、ニジュール湾曲部に至る中央サハラルートが繁栄していた。⁶⁷⁾ しかし、先述のヒラリの米製などにより、このルートは北側で切断され、その機能を弱めていた。またファーティマ朝のエジプト支配が強化されるに従って、エジプトとの取引に重点が移り、イフリキアの人々

のエジプト移住が始まり、ムラービト朝の出現と共に、モロッコの商業活動が活発化し、イフリキアが、サハラ交易に占める役割は次第に減退期に入る。⁶⁸⁾

4 中世サハラ長距離交易の再組織化

ームラービト、ムワッヒド朝とマリ王国、三世界をつなぐサハラ砂漠のキャラバン・ルートー

東のファーティマ朝の衰亡に伴って、西のモロッコでは、ベルベル人の王朝ムラービト朝が西サハラにおこり、イドリス朝を倒し、首都フェズを奪取し、(1096) マラケシュに遷都する。(1106) 8世紀から10世紀にかけてベルベル世界の首都の役割を果たし、「スーダンの金」のための北の主要な取引中心地であったシジルマサも1056年に征服され、またテクルル人の国家との連合軍により、アウダゴーストも1054年にすでに征服されていた。この頃までに北アフリカ世界との間に、主として塩金取引を組織化し、その利益を享受していたがガーナ王国の状況は、先述のようにアル・ベクリの「1067年のガーナ」に詳しく記されているが、このムラービト朝が、アウダゴースト、シジルマサの占領に続いて、この西のサハラ砂漠のキャラバン・ルートの南の到達点、「黄金の国」ガーナを目指したのは、極めて自然な成行きであった。ムラービト朝二代目のカリフ、アブー・ベクルがガーナへの聖戦を開始したのは1061年から1062年にかけてであるが、「12のモスクをもつ商業地区と王宮のある地区」からなるクンビを占領したのは1076年のこととされる。⁶⁹⁾ 当然のことながら、この占領により、塩金取引に関するガーナの諸体系は変容し、サハラ砂漠のキャラバン・ルートの新たな編成が行なわれることになる。シジルマサから南下し、アウダゴーストに向かうルートは、タガザの塩山の開鑛と共に、タガザを経由して、ニジュール湾曲部へ至るルートに主軸の座を明け渡した。⁷⁰⁾ (図2 参照)

ムラービト朝は、「スーダンの金」を基に活発に貨幣鑄造を行い、その結果、顕著な商業的繁栄期を迎えることになる。ムラービト人侵攻後の後ウマイヤ朝下のイベリア半島でも、アンダルシアのディナールの豊富な鑄造が見られ、侵攻後にもその傾向は持続されたが、鑄造の主たる舞台は、むしろマグレブに移り、かつてないほどの大量の

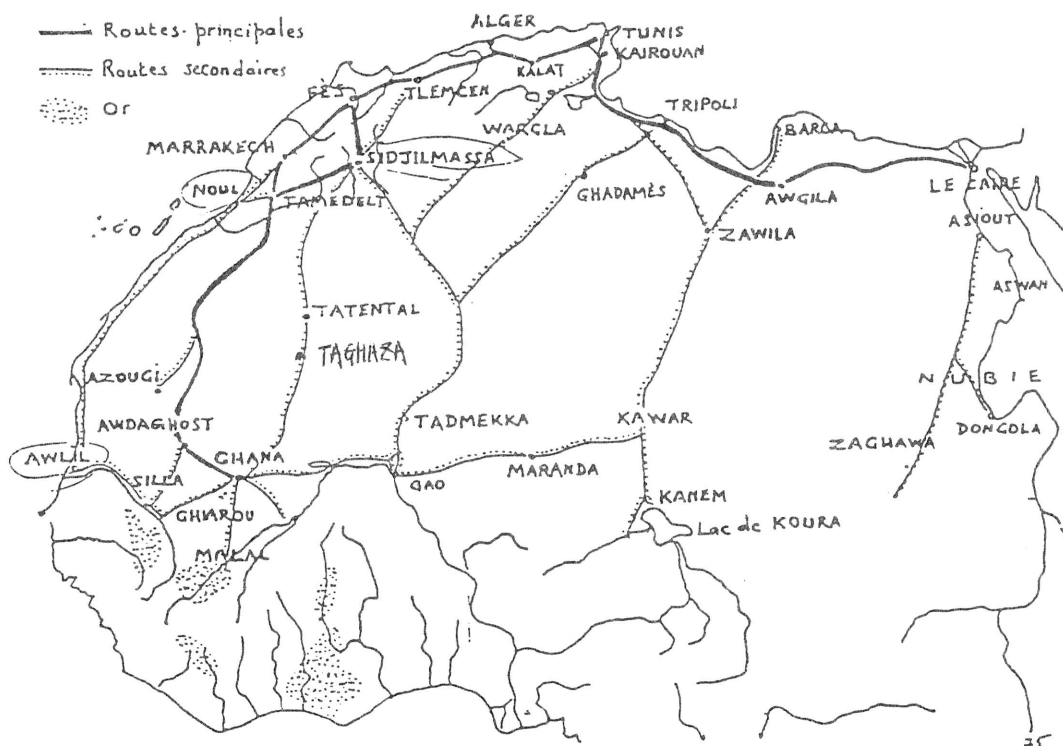


図2 11世紀から13世紀にかけてのサハラ長距離交易ルート

R.Mauny Tableau géographique de l'Ouest Africain au moyen âge 1961より

金貨が鑄造された。1070年から1172年にかけて、
 アンダルシアとマグレブで鑄造された金貨をその
 鑄造地別、年代別に個数を記した以下の表（J・
 デビスによる）によってこの傾向をはっきりと確
 認することが出来る。⁷¹⁾

これによれば、アンダルシアではアルメリーア、
 グラダナ、セビリアが、マグレブではアフマッ
 ト、フェズ、マラケシュ、ヌル、シジルマサが高
 い鑄造率を示している。J. デビスは、このムラ
 ビト朝の金の需要は、国家自体ではなく、上記の
 地に在往する商人たちによって高められ、商業的
 機能の効率を上げるために、さらに良質の貨幣鑄
 造が求められる。その素材を求めて、サハラ砂漠
 のキャラバン・ルートを南下し、それに伴って、
 彼らは金と交換するためのさまざまな商品を南へ
 もたらした、と推測している。⁷²⁾ また1969年、ア
 ウダゴーストの遺跡の近郊のティディカで発見さ
 れた四つの貨幣は、ムワッヒド朝出現前の1123年
 から1133年にかけて、一つはマラガで、三つはマ
 ルシで鑄造されたものであることが判明してい
 る。⁷³⁾

表1

	H 448	H 461	H 471	H 481	H 491	H 501	H 511	H 521	H 531	H 541	Totaux
	448	461	471	481	491	501	511	521	531	541	
	460	470	480	490	500	510	520	530	540	550	
Algesiras							4				4
Almeria					3	5	12	13	20		58
Cordoue			2	4	1				1	1	9
Denia				11	2						13
Grenade				1	5	11		5	2	1	25
Malage				4	3						7
Murcie						9	1				10
Seville				1	6	1	8	7	7	1	31
Valence					9	5	2				16
Divers				1	7		1				9
Agmat				6	11	10	5	5	12		49
Ceuta				1					1		2
Fes				1	2	4	4	10	15		36
Marrakech				1	4	1	4	9	12	1	32
Nul					2	3	5	8	17		35
Sale						1					1
Sigilmasa	11	11	11	9	9	4	4	9	9		77
Tlemcen					1	1	2		4		8
Divers							1				1
Totaux	11	11	11	22	79	59	60	66	100	4	423

先述のように、イフリキア及び中央マグレブで
 はヒラリの来襲以後、サハラ砂漠のキャラバン・

ルートが切斷されていたのでムラービト朝は、より西側のルートを重視し、西のモスリム世界の経済的繁栄を維持することに力を注いでいたと考えられよう。⁷⁴⁾

12世紀半ば、この貨幣鑄造を活発に行っていたムラービト朝を倒して、アトラス山中より、ムラービト朝が出現し、モロッコ全土にその支配権を拡げていく。「スーダンの金」はこの間も、主としてジジルマサに終結し続け、ムラービトの活発な貨幣鑄造は、イベリア半島への進出期をはさみ、そのままこのムワッヒドに受け継がれていく。⁷⁵⁾

ムワッヒドはフェズ、マラケシュを征服し、1148年にモロッコ全土の平定を完了した後、1185年ハマニデス朝の支配する中央マグレブを、1209年にはネフサの戦いに勝利し、ジリッド朝の支配するイフリキアをも手中に収める。ムワッヒドは、イフリキアの港の復興などを行ったが、サハラ交易にはそれほど関心を示さず、ムラービト期に放棄された、イフリキアを起点とするサハラ交易の古くからの東の軸の復活は見られなかった。⁷⁶⁾ ムラービト・ムワッヒド両王朝の時代を通して、北アフリカの側からは、サハラ砂漠のキャラバン・ルートは主として西のベルベル諸部族によって管理維持がなされていたのである。⁷⁷⁾

一方、すでに9世紀に、ガオから金の交易の管理権を取り上げていたガーナ王国は、ムラービト朝支配下の、このベルベル諸部族によるサハラ交易の管理独占と、大西洋岸の黒人の王と争いつつも、西アフリカ世界においては、金交易の管理と、北の塩に対する金との交換に関して、その後のムワッヒド朝のサハラ交易に対する無関心な姿勢にも助けられ、依然として、充分な政治的、経済的優越性を維持し続けていた。⁷⁸⁾

時期を同じくして、産業的に進展の著しいヨーロッパの商人が北アフリカのマグレブの港に出入りするようになる。ヨーロッパの商品は10世紀頃から、ジブラルタル海峡南側のセウタ在住のアンダルシアの人々を通して、マグレブに入りつつあったが、13世紀半ば以降、統治力に衰えを見せはじめたムワッヒドのイフリキア支配につけ入るような形で、マグレブの港町に大量に流入しはじめる。⁷⁹⁾ 西アフリカ商業軸の出口であるオラン、アルジェ、ブージー、チュニスには、主としてイタリアのピサ、ジェノア、ベネツィアの商館が建ち

始め、⁸⁰⁾商人たちの出入りも活発になり、ヨーロッパ商人の交易の拠点としての役割を果たす。モロッコでのマリーン朝の創始と共に、イフリキア方面ではムワッヒドのイフリキア総督ブー・ムハンマドの興したハウス朝が独自の動きを見せ、その首都チュニスからは偏兵として、ヨーロッパに渡る人間たちも現れはじめた。⁸¹⁾ また北アフリカのイスラム世界は、北のキリスト教徒に対する守備が困難になりはじめたので、10世紀以後、戦いによる荒廃よりも貢納金の支払いを望んだこともあり、北アフリカからヨーロッパへの金の流出は漸次増加していくことになる。⁸²⁾

J. デュプレシィはヨーロッパで発掘されたアラブの金貨を時代別に3つのグループに分け、そのうち第3グループに属する、主として12～13世紀にムワッヒド朝支配下の北アフリカ、アンダルシアで鑄造されたものが北イタリア、フランス各地で数多く発見されていることを記している。⁸³⁾ また1251年頃ジェノバで鑄造されたジュノヴィーノ、1265年頃フィレンツェで鑄造されはじめたフローリン、1284年頃ベネツィアで鑄造されはじめたドゥカートなどの金貨も、北アフリカからの金を基にしたものであったと考えられよう。⁸⁴⁾

ムラービト朝の支配の下に「スーダンの金」を北アフリカに送り続けてきた、西アフリカのガーナ王国はムラービト朝の衰退と共に混乱期に入り、フラニ人たちの一派が独立を回復するが、1203年頃マンディンカ族のスマンガルによって、クンビサレーが占領される。しかし永続的な法と秩序の制度を樹立することは出来ず、キャラバン・ルートは荒廃しはじめたが、1240年頃国外追放されていたスマンガルの弟ヌンディアタがスマンガルを破り、政権を奪取し、マリ王国を建て、その後3代にわたって建国事業が続けられ、金産地とサハラ交易の拠点が確保される。⁸⁵⁾

このマリ王国の登場と共に、西アフリカの長距離交易の再組織化が始まり、12世紀半ばから14世紀半ばにかけては、西アフリカ、マグレブ、ヨーロッパの三つの世界が、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを媒介として接合されることになる。⁸⁶⁾

ガーナ王国時代に、サハラ砂漠のキャラバン・ルートで交易活動に従事したのは、主として、アラブ人、ベルベル人であったのが、マリ王国時代には、西アフリカの黒人たちもこの交易活動に参

加しはじめる。14世紀にシジルマサから、黒人の王の都マールリーを訪れたイブン・バトゥタは、帰途、北へ向かう黒人のキャラバンと行を共にした。⁸⁷⁾マリの商人たちは、北で主として金の売却をすませたあと、帰路の商品の輸送のコストに見合うものとしてタガザの塩を手に入れたことは疑いない。⁸⁸⁾すなわち、マリの商人たちはベルベル人による塩の独占による圧力をこうむることなく、独自に塩を手に入れ、マリまでの輸送に従事しはじめる。マリの商人たちが塩を安い価格で手に入れ、マリ王国内に持ち込んだ時の価格については、さまざまな記述がある。10世紀、イブン・ハウカルはラクダに積んだ一荷の塩は金1kgと等価であったとし、イブン・バトゥタはワラタ、マリで購入した金50～150gと等価であったとしているし、カダモストはトンプクトゥでは金1kg、マリで1.5kgとしている。⁸⁹⁾マリは少し前のガーナと同じく、森林の黒人の世界へ、より高い価格で塩を売る媒介者の地位を演じていた。マリ王国内には、ワンガラと呼ばれる特権的な商人階級が出現し、南の金産地との交易に携わっていた。E・W・ボヴィルは、このワンガラが出向いた森林帯の金産地をセネガル河の上流とファメレ川との間のバンブク、ニジェール河の上流にティンキッソ川が合流するところにあるブレ、ヴォルタ河上流のロビ、黄金海岸の奥地のアシャンティの四箇所をあげている。⁹⁰⁾このあたりから金は王国の商業的中心地に流れ、マリの商人、もしくはアラブ・ベルベル商人たちによって、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを北上して、北アフリカ・マグレブ世界にもたらされ、さらにマグレブの港に商業拠点を築きつつあったヨーロッパ人たちの手にわたることになる。

5 中世サハラ長距離交易の展開

ーサハラ砂漠を行き交う商品についてー

マリ王国内時代に南から北へもたらされた商品は、やはり金が主体であったことは明らかであるが、金以外にも、奴隷、銅、布などがあげられよう。

奴隷に関しては、アル・オマリが、モロッコのスルタンが祈りのあと群衆の中で、黒人奴隷の輪に取り囲まれて座っていたことを記しているし、⁹¹⁾イブン・バトゥタもタカダで25ミトカルで奴隷を購入し、モロッコへの帰還時には600人の、

女奴隷を伴った何ともひどいキャラバンと行を共にしたことを記している。⁹²⁾このように奴隷は南から北への輸出品として重きをなしていたことは疑いないが、銅は、その輸送と交易に関して、未解決の問題が、まだまだ多い。アル・ベクリが記すように、ガーナ王国時代には地中海側のスースではスーダンへの出荷に際し、銅一荷につき5ミトカルの税を義務づけていた⁹³⁾ことなどから知られるように、銅は北から南への輸入品としての重要品目であり、R・マニもアフメットから南への銅の交易の存在を主張している。⁹⁴⁾しかし、J・デビスは、それは自然のままの銅ではなく、宝石などと共に、装身具の一部として、或は料理や洗身のための容器といった日用品として、北アフリカで製品化されたものであり、純然たる銅の輸入ではないとしている。⁹⁵⁾西アフリカの銅の産地として、有名なタケダの銅山は、13世紀に採掘が始まってからは、14世紀には金を供出する森林の黒人たちの世界との重要な交易品目であった。この点についてはアル・オマリが、マリ王は100ミトカルの銅を66 $\frac{2}{3}$ ミトカルの金と交換、すなわち約500の銅と約333の金が交換されていたという事実を指摘している。⁹⁶⁾自然なままの銅の生産に関しては、12世紀以後、スーダンとマグレブは同じ状況を呈するようになり、決して北から南への一方通行でなかったことは明らかである。

布も銅と同じく、ガーナ時代にはマグレブから西アフリカへもたらされた北から南への輸入品として位置づけられていた。⁹⁷⁾アル・ベクリは、羊毛製の衣服がアフマットの商人たちによってモロッコへ、そしてテクロール、カワール経由で西アフリカへもたらされたことを記している。⁹⁸⁾またイブン・バトゥタもワラタの住民の衣服はエジプトからもたらされたものであること、及びマリ王の豪華な丸天井にはエジプトからの絹織物が装飾の一部として使われていたことを記している。しかし同時に、イブン・バトゥタは南からきた布が交易用貨幣として、ミルク・バター、肉などと交換されていたこと、⁹⁹⁾また少し後になるがレオ・アフリカヌスによる、アハガルの遊牧民たちが通過するキャラバンから徴収していた税は、衣服で支払われていたという記述¹⁰⁰⁾などからは、布地に関しても、銅と同じく、マリ王国内で、主として綿などの生産、衣服の製造などが行なわれ、王国

内を潤す商業的財源の1つであったのではないかと考えられる。

以上のように、マリ王国時代に南から北へもたらされた（輸出）商品として、金以外には奴隷が重要品目であったが、銅や布なども、従来考えられてきたように、主として北から南への輸出品としてではなく、南から北への輸出品として、重要な役割を果たしていた可能性も検討されるに値しよう。R・マニはこの他にメレゲッタと呼ばれる香料、コーラ、羊の乾肉、皮革などもあげているが、¹⁰¹⁾やはり、決定的に重要なものは、金と奴隷であって、他の商品は、補足の役割を果たしたにすぎない。

逆に北から南へもたらされた（輸入）商品としては、塩がその中心であったが、塩以外には馬、カウリス、デーツ、ガラス細工品などがあげられよう。1171年には、エジプトではファティマ朝が滅びアイユーブ朝が興るが、「スーダンの金」に対しては、西のモスリム世界がさらに強力に介入するかたちになり、その見返りとしての提供品は多様化してきた。

馬は、マグレブから南への輸出で利益があげられた唯一の動物であった。¹⁰²⁾ラクダ (dromadaire) はサハラでの輸送には適するが、戦闘には馬ほどの効力を発揮しない。¹⁰³⁾マグレブと同じく、西アフリカでも馬は軍隊、とくに騎兵に必要不可欠なものであった。アル・ウマリは、マリの軍隊が10000の騎兵を所有していることを記しているし、¹⁰⁴⁾トンブクトゥでは王は3000の騎兵を有し、これらはキャラバンでベルベル産の良質の馬がもたらされ、まず王の前に並ばされ、選ばれ、代価がきちんと支払われていた。¹⁰⁵⁾馬はポルトガル人が、ギニア湾沿岸に到着するまでは、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを北から南へもたらされた輸出品として奴隷と交換するための、恒常的な交易の対象であり続けた。

カウリスはインド洋からもたらされたものであったが、早くから西アフリカへ導入され、マリでは主要な輸出品として、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを南下し、貨幣として商取引に使用され、かなりの利益をあげていたという。¹⁰⁶⁾アル・ウマリやイブン・バトゥッタもカウリスが、ガオマリで商取引に用いられていることを記している。¹⁰⁷⁾

デーツは栄養価の高い、効率良い商品として、

ドラやシジルマサのデーツが、タガザの人々の食生活に供せられていたし、¹⁰⁸⁾ワルグラの商人もデーツを南へもたらした。¹⁰⁹⁾イブン・ハルドゥーンもスーダンで消費されるデーツはトゥアトやワルグラからもたらされたものであることを記している。¹¹⁰⁾

ガラス細工品についても、イブン・バトゥッタがワラタからマリへもたらされていたこと、¹¹¹⁾アル・ウマリもシジルマサからスーダンへ、真珠などと共にガラス玉が輸出されていたこと、¹¹²⁾イドリシも、アフマットからスーダンへ、あらゆる種類の真珠、ガラスの首飾りが輸出されていたことを¹¹³⁾記している。ガラス細工品は、この頃、ベネツィアやビザンチンで大量につくられ、ヨーロッパ商人によって、マグレブにもたらされていた。有名なマンサ・ムーサの巡礼以後、エジプト方面からもガラスのプレスレットなどがもたらされはじめた。¹¹⁴⁾またタガザの遺跡からもガラス細工品が一部発掘されている。¹¹⁵⁾西アフリカとエジプトとの交易の存在は、イブン・バトゥッタがワラタに滞在中、住民がエジプトからきた華美な衣服を身につけていたことを目撃したり、マリのスルタンが、観衆を隔てる窓に、エジプト製の縞の布の覆いをかけていたという記述¹¹⁶⁾からも明らかである。次章でも述べるように、マンサ・ムーサのメッカ巡礼以後、ファティマ朝の没落以来とだえていたエジプトへのルートが再開通したのであった。

以上のように12世紀半ばから、14世紀半ばにかけては、西アフリカではマリ王国の発展に伴って、南の森林地帯よりもたらされた金や奴隷が、王国の商業的繁栄を裏づける財貨とされ、銅や布などの商品をも携えて、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを北上することになる。塩、馬、カウリス、デーツ、ガラス細工品などを携えて、南下し、金や奴隷を購入したマグレブ世界は、これらをヨーロッパからもたらされる商品の代価とした。ヨーロッパもこのサハラ長距離交易から大きな利益を引き出す結果となった。ヨーロッパでアラブの通貨が最も流通したのは丁度この頃であった。¹¹⁷⁾

6 中世サハラ長距離交易の展開

ーマリ王国とマリーン朝、及びエジプトを結ぶキャラバン・ルートー

前章で述べた商品の流通のルートとなった、この時代のサハラ砂漠のキャラバン・ルートを検討

してみよう。

西アフリカではガーナ王国がムラービト朝による占領を契機に崩壊し、マリ王国が登場する。北アフリカ、モロッコではムラービト朝からムハッヒド朝への覇権交代がなされ、その後13世紀後半には、現在のアルジェリアとの国境周辺を活動領域としていた遊牧民が、安定した食糧確保のために、山岳地帯から平原部に進出し、征服事業を進めた。没落したムハッヒド朝にかわって、1269年マラケッシュを占領したマリーン朝の登場である。

マリーン朝は、イフリキアのハフス朝や、トレムセンを首都とするジアン朝と競合しながらサハラ砂漠のキャラバン・ルートの制覇に乗り出し、14世紀、マリーン朝の最盛期には、その全域にわたって掌握することになる。ムラービト朝から、ムハッヒド朝、マリーン朝の時代にかけては、主としてモロッコのモスリムがサハラ交易の主役を演ずることになるが、マリーン朝はハフス朝の抵抗や、後のポルトガルなどのヨーロッパ勢力の進出などにより、東のマグレブ方面の商業中心地を恒久的に管理維持することには成功しなかった。¹¹⁸⁾ しかし11世紀から16世紀にかけて、ガーナ・マリ両王国の時代を通して、黒人世界から流出していった金は、モロッコがその利益を独占するかたちになっていた。先述のように良質の貨幣鑄造を続けていたムラービト、ムハッヒド時代に継いで、モロッコはこの金を基に経済の覚醒がはかられ、それまでは東のマグレブの領域よりも、遅れをとっていたモロッコの諸都市が商業的に活気を帯びはじめた。¹¹⁹⁾

この時代のサハラ砂漠のキャラバン・ルートは、ガーナ時代のシジルマサーガーナという西の主要ルートに比べて、ニジェール湾曲部に向かって、やや東寄りの傾向を示している。それはシジルマサから、塩鉱のあるタガザを経て、ワラタもしくはトンブクトウに至り、¹²⁰⁾ さらに南下し、マリ王国の伝説の首都ニアニに向かうルートである。14世紀半ば、イブン・バトゥタは、このルートをたどり、サハラ砂漠を南下し、ニジェール湾曲部に到達し、帰路はさらに東寄りのトゥアトを経由するルートでシジルマサへ戻っている。彼はシジルマサからタガザまで25日間を要し、タガザに10日間滞在したあと、ワラタまで26日間を費している。¹²¹⁾ 前代のイブン・ハウカルやアル・ベクリに

よれば、シジルマサからアウダゴーストまで50日間の距離である。¹²²⁾ イブン・バトゥタはアウダゴーストより、ほぼ水平にまっすぐ東に約360km離れたところにあるワラタまでほぼ同じ日数を費していることになるので、この日数はほぼ妥当なものと考えて、差し支えないだろう。このワラタはシジルマサから西のルートの南の終着点として、マリ王国はスルタンの代理人を住まわせ、北からの商人に厳しい監視の目を光らせ、非常に堅固に維持しようとした。¹²³⁾ ここから黒人の国がはじまるというワラタの町の住民の大部分はマッスファー族で、イスラム教を信じ、規則正しくコーランを読唱していたという。¹²⁴⁾ のワラタの町は15世紀にトゥアレグ族の手に落ち、繁栄はおぼろげになり、次代のソンガイ王国へ吸収されていくことになる。¹²⁵⁾ イブン・バトゥタは、帰路はトゥアトを経由し、シジルマサに戻るが、その途中で牧草の多いカーヒルというところから3日間、水もない不毛の砂漠を越え、さらに15日間で鉄分の多い水のある地点に出る。ここで路が二分し、一つはトゥアトに、もう一方はガートを経てエジプトに通じている。¹²⁶⁾ ワラタ、もしくは水平方向に直線上東に450kmの地点にあるトンブクトウから、ファティマ朝の没落以来とだえていたエジプトへ向かうルート、サハラ砂漠を斜断するルートが、マンサ・ムーサのメッカ巡礼以後、再開通していたことは疑いないであろう。(図3 参照)

イブン・ハウカルは10世紀に、エジプト、ガーナのルートの存在について述べているが、¹²⁷⁾ それはガーナからニジェール湾曲部北岸を東進し、マランダを経て、現在のニジェールの東部ビルマ近郊のオアシス・カワールを通過し、ナイル川上流部ダルフォールに達し、ナイル河に沿ってカイロまで北上するものであった。このルート上で、カワールより西のアイール山地とダルフォール間が、長い期間にわたって放棄されていたことがイドリスによって記されている。¹²⁸⁾ それについては、レオ・アフリカヌスがモスリムのエジプト占領後、このルート沿いに住むアラブ系住民が余りにも貧しかったため、100年以上にわたって、いかなるキャラバンも、彼らの住む砂漠の緑を通らなかった¹²⁹⁾ と記していることに関連してこよう。

やがて、ワラタもしくはトンブクトウから、古代の戦車ルート¹³⁰⁾ としてよく知られるガオから

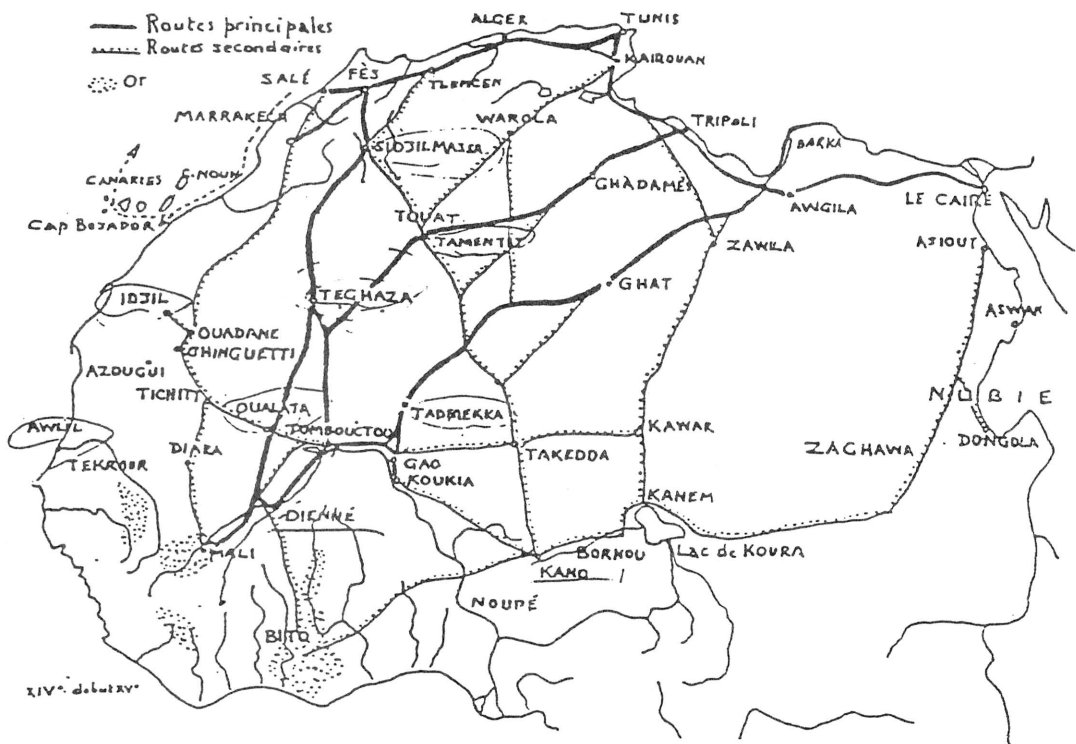


図3 マンサ・ムーサのメッカ巡礼(1324~1325)以後の、サハラ長距離交易ルート

(R.Mauny Tableau géographique de l'ouest africain au moyen âge 1961.より)

タデメッカ、ガートを経て、フェザン地方を横断して、カイロに達するルートが開通する。(マンサ・ムーサの巡礼もおそらくこのルートをとったものと思われる)

エジプトでは、12世紀末ファティマ朝没落以来、金貨鑄造が中断され、13世紀から14世紀にかけては金貨より、銀貨の鑄造が盛んに行われたので、アイユーブ、マムルーク朝時代には、エジプトの市場は「スーダンの金」に対する需要は低かった。¹³¹⁾しかしイブン・ハルドゥンは、この頃カイロからマリへ毎年12000頭のラクダのキャラバンがタケダ経由で往来していたことを記している¹³²⁾し、またカダモストも、マリを出てコキヤ(ガオ)経由でカイロの向かうキャラバンについて記しているし、¹³³⁾シジルマサのディナールがカイロで流通していたこと¹³⁴⁾などからも、マリーエジプト間の交易の存在が裏付けられよう。

またマリーン朝も、その最盛期には、当時のエジプトのマムルーク朝との関係維持のため貢物をもたらしていたことが知られている。1337年、マリーン朝の大使は、イフリキアのハウス朝よりも

気前の良いところを強調するかのように、マムルークに対して、金で刺繍されたベッド、金で裝飾されたサーベル、金のあぶみなど、金をふんだんに使った非常に贅沢な贈り物をしている。¹³⁵⁾このモロッコとエジプトとの友好関係にも支えられ、マリ王国は、サハラ砂漠のキャラバン・ルートを通して、双方との商業関係を維持することが出来たとも考えられよう。

7 中世サハラ長距離交易の爛熟期

ーヨーロッパ勢力の進出とソンガイ王国ー

先述のように、この頃北アフリカの地中海沿岸に姿を見せはじめたヨーロッパ人たちは、マグレブ世界を通じて、西アフリカから富を吸収しはじめていたが、デュプレシイが示したように、12~13世紀に顕著になってきた金の流入が、14世紀には、以前にも増して強力に行なわれるようになってきた。¹³⁶⁾イタリアでは14世紀以後、都市の大商人、大銀行家らによって手形、小切手の使用が盛んになり、貨幣の必要性が減少する傾向もあったが、フランス・イギリスでは、これらの会計的手

法の遅れにより、金貨の価値は高まっていた。金の取引については、ジェノアの商人たちの活動が、1377年の税関の記録から明らかにされる。ジェノアの商人たちはバレンシア、セビリア、マラガ、パレルモより、金を主として貨幣の形で輸入し、イタリア諸地方、アレキサンドリア、ベイルート、バルセロナ、ナポリへ輸出している。¹³⁷⁾これらはマグレブから最初、スペイン方面に輸出された「スーダンの金」が基になっていると考えられよう。「スーダンの金」はヨーロッパの商業的流通の中に、大きなウエイトを持ちはじめたのである。しかし、当時のヨーロッパ人のアフリカへの商業的な介入の度合、性格などについては、当時の商業に関する秘密事項でもあるので、不明な部分も非常に多く、この点に関しての正確な論述は非常に困難である。

すでに12世紀末から13世紀初めにかけて、セウタへの攻略を続けていたポルトガルは、15世紀初めには、ジョワン1世の時代、有名なエンリケ航海王の指導の下に、西アフリカ沿岸を南下しはじめていた。西アフリカ内陸部の金や奴隷を求めて、接触可能な部分が探検され、まず、アルギン島を内陸交通路への拠点とし、¹³⁸⁾ジョワン2世時代の1487年にはウワダンに在外商館を設立しようとした。しかし、ここの住民に取り入って、西アフリカの商取引のサイクルに入ろうとする試みは失敗した。¹³⁹⁾そのためポルトガルは、さらに大西洋岸を迂回し、モスリムの影響圏からはなれ、すでに到達していたギニア湾方面に交易の場を局地化し、塩のかわりに布、馬、銀を、ラクダのかわりにカラベル船を、陸上ルートのかわりに沿岸輸送という新しい商業パターンを築き上げることになる。¹⁴⁰⁾ポルトガル商人が求めたのは最初は金であったが、次第に金よりも奴隷に重点をおきはじめた。西アフリカ沿岸各地の植民地化に必要な労働を奴隷に担わせるためであった。¹⁴¹⁾しかし、長い歴史を踏まえてきたサハラ砂漠のキャラバン・ルートを行われていた交易活動は、このポルトガルの登場によってただちに破壊されたのではなかった。

ガーナ・マリ両王国時代を通して、維持されてきた伝統的なサハラ砂漠に西のキャラバン・ルートに、一筋の西の大西洋岸に向かうルートが加わる。先述のトンブクトゥ、ワラタ経由で、イジルの

塩山に近いウアダダンへ向かうルートである。¹⁴²⁾またここから北へドラ、シジルマサ、フェズ、セウタへ向かう11世紀までの道も、しばし復活したようである。¹⁴³⁾このルートの登場の背景にポルトガルが一役買っていることも十分に考えられる。イジルの塩がウワダン経由でトンブクトゥにもたらされ、トンブクトゥからシジルマサ、フェズに金をもたらされる。サハラ砂漠を舞台にした商業活動の伝統的な基盤である塩金交易のパターンはマリーン朝によっても継続維持されることになる。¹⁴⁴⁾またイブン・バトゥタがマリ王国からの帰路に通過した、より東のサハラ砂漠のキャラバン・ルートもこの時期には、頻繁な往来があったようである。主要なルートはトンブクトゥ、ガオからタデメッカ、アハガル台地を経て、一方はトウアトを経由し、ワルグラなどを通過し、サハラ・アトラスを越えて、トレムセン方面、マグレブへ至り、もう一方は、より北東のガートからガダメスを通過し、トレムセンへ、もしくはアウギラからカイロに至るものである。イブン・バトゥタが同行したキャラバンの目的地はガダメスであった。¹⁴⁵⁾アル・ベクリはタデメッカからガダメス、もしくはワルグラまで50日の距離と記している。また¹⁴⁶⁾この頃、多くの支線が登場し、トンブクトゥ、ガオから東へタケダ、アガデスへ、¹⁴⁷⁾南はカノへ向かうルートが活発に使用されていた。またガートからはフェザン経由でエジプトに至るルート、またカノから東へ向かい、チャドからフェザンの商業的中心地ザウラへ北上し、エジプトに至る、すでに9世紀に開通していたルートも、この時代にはよく使用されていた。¹⁴⁸⁾9世紀初めにチャド湖周辺に登場したカネムー、ボルヌー帝国と、エジプトのマムルーク朝とマグレブのハウス朝は良好な関係を維持していたらしい。¹⁴⁹⁾エル・ベクリはカネムーから、フェザンのザウラまで、40日の距離であるとしている。¹⁵⁰⁾またイドリシも、現在のニジェール東部のカワールから、明礬がフェザンに向かうルートを通して北へ向かったことを記している。¹⁵¹⁾

さて、先述のようなポルトガルをはじめとした、北アフリカ地中海沿岸、西アフリカ大西洋岸から、ギニア湾沿岸にかけての、ヨーロッパの進出期に重なり合うように、モロッコでは15世紀後半にマリーン朝が衰退期に入る。代って、かつてのイド

リス朝を支持するアブド・アル・ワディデスが台頭し、チュニジアのハフス朝などとも競合しつつ、サハラ砂漠のキャラバン・ルートの掌握に乗り出していく。しかし、ポルトガル、スペインの進出に伴い、ルートの北端の到達点、すなわち地中海への出口は、ヨーロッパ人の干渉から避難するために、より内陸部へ移動した。¹⁵²⁾しかし、このルートの北端の管理維持力低下に伴い、遊牧民による略奪が活発化し、これに対する治安強化が、西アフリカからもたらされる商品への課税となつて、価格は次第に高騰した。レオ・アフリカヌスは、キャラバン通過を保証するための遊牧民自身による課税と、トレムセンの王による出入りに対する課税が重なり、地中海に到達するまでに西アフリカからもたらされた商品の価格は、漸次高いものになっていったことを記している。¹⁵³⁾これより少し前、ニジェール湾曲部では、主としてガオで、北方からやってくるベルベル人と積極的に交易活動をすすめていた、進取の気性に富んだソングアイ人が、1375年頃、マリ王国からガオの独立を奪回する。¹⁵⁴⁾ソングアイ人は1400年頃、マリ王国の首都であったとされるニアニを略奪し、その後追いつめられたマリのスルタンは、1534年にポルトガル人の援助を求めたが、帰ってきたのは贈り物だけであったという。¹⁵⁵⁾これより以前にガオとソングアイ地方の主になったスニ・アリは1464年頃、ドゴン族を撃退し、バンディアガラ山地に追い込み、北からトゥアレグ、南からモシ人の侵入を強力な騎馬隊によって撃退し、15世紀末には、ソングアイ王国の基盤をつくりあげた。1453年に王位についたアスキア・モハメッドの時代には強力な中央政府が作られ、その最盛期を迎え、1494年から1497年にかけての彼のメッカ巡礼中、彼の不在にもかかわらず、本国では何の紛争も起こらなかったという。¹⁵⁶⁾ソングアイも前代のガーナ・マリと同じく、サハラ砂漠のキャラバン・ルートの再組織化に努め、とくにエジプトとの関係を重視した。¹⁵⁷⁾永らく塩金交易を支えてきたタガザの塩山も、ソングアイによって占領されたが、16世紀には塩の涸渇に伴って廃鉱され、それに代わって約200km南東方向のタウデニが開鉱され、同じくソングアイの管理下に入った。¹⁵⁸⁾西方のイジルの塩は、この頃タガザやタウデニに比べて、生産量が僅かで、サハラ交易全体には二次的役割しか果たさなかったよう

である。イジルでの1日当たり産出量は20～25バレルであったのに対して、タウデニでは80～90バレルの産出量があり、これは1200kgの金に相当するという。¹⁵⁹⁾

このソングアイ王国の強力な経済監視の下に、サハラ砂漠のキャラバン・ルート全体が統括され、その商業活動はさらに促進されることになる。

ブルーレ、ボンドゥク、アシャンティなどの南の森林地帯よりワングラ、もしくはウンガロスと呼ばれる信頼され、権威をもった産地仲買人が金をもたらし、タウデニからトンブクトゥを経て、ジェンネなどの市場にもたらされた塩と交換された。V・フェルナンデスは、このワングラの或る者が6000ミトカル（283kgの金）に等しい量の仕事をこなし、トンブクトゥからジェンネへの塩の取引に関しては10000ミトカルに値する取引をして、すべて正直な取引で、信用状を必要としないことを記している。¹⁶⁰⁾またアル・ベクリは、この頃アウダゴーストで螺旋形によじった金のプレスレットがつくられていたこと¹⁶¹⁾や、タデメッカでは、砂金から不純物が取り除かれつつ、金貨が鋳造されていたことを記している。¹⁶²⁾またV・フェルナンデスはワラタでユダヤ人の金銀細工師が輸出入の「スーダンの金」の吟味の商品化に雇われていたこと、¹⁶³⁾レオ・アフリカヌスも、トンブクトゥの王が貨幣と金塊の宝に囲まれていたこと¹⁶⁴⁾を記している。

また奴隷については、タリフ・エル・ファターハには、16世紀、アスキア・ダオウド王の時代、トリポリタニアの商人が500人の奴隷を1人あたり10ミトカルで購入していったことが記されている。¹⁶⁵⁾レオ・アフリカヌスによると、ガオには、若い男女の奴隷が1人あたり6デユカートで売却される市場があり、再売却には8～9倍の値がつけられ、北方からもたらされる馬と交換されることもあったという。¹⁶⁶⁾ソングアイの強力な騎馬部隊に必要な馬は奴隷との交換によって調達されていたのであろう。金、奴隷以外には、カダモスト、レオ・アフリカヌスが記しているメレゲッタと呼ばれる香料の一種がマグレブにもたらされ、¹⁶⁷⁾15世紀以降ヨーロッパでの需要が高まった。ムスク・デ・シベッテ（じゃこうの香水）なども、西モーリタニアの沿岸から直接ポルトガルにもたらされた。その他西サハラ方面からは、主として羊の皮

革が北へもたらされていたこともレオ・アフリカヌスが記している。¹⁶⁸⁾

塩もまた、北から南への地域間商業の主要商品として、ガーナ、マリ時代と同じくその取引が続けられていた。トンブクトゥへの旅の途上、タウデニに滞在したレオ・アフリカヌスは、トンブクトゥまで800kmの距離をラクダ一頭あたり、塩板4枚を担いながら、20日間の行程で選ばれ、一部はジェンネにもたらされ、¹⁶⁹⁾ジェンネでは、先述のワンガラ（ウンガロス、もしくはディオウラ）と呼ばれる商人らによって取引され、塩板を大きなピログにのせて、ニジュール河を14日間下り、ロバ又は人頭で金鉱の領域に運ばれ、ビトウ（黄金海岸）、ボンドウクなどの金と交換されたことを記している。¹⁷⁰⁾また塩の主要な市では、砂金と交換されていた。¹⁷¹⁾

また同じく北から南へもたらされた商品としては、奴隷と交換される馬が、マリ王国時代と同じく、高価な輸入品として扱われ、ガオでは馬一頭あたり、ヨーロッパの4～5倍の価格で取引さ

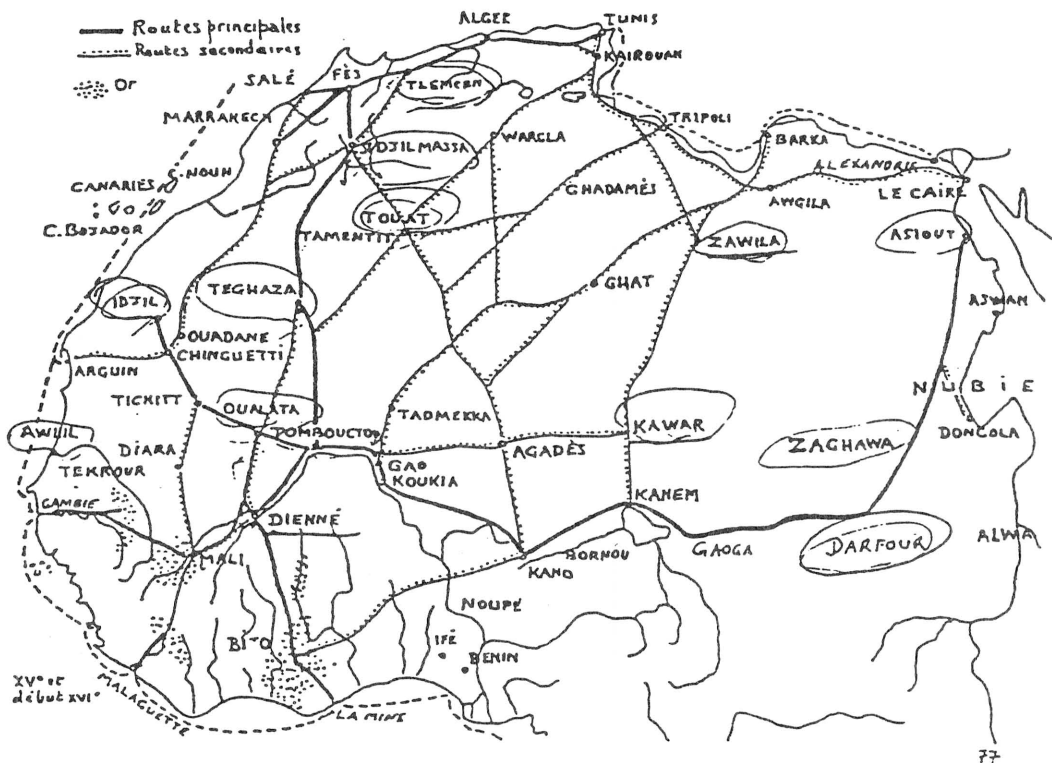
れていたし、¹⁷²⁾またボルヌーでは、王は、3000の騎兵を保持し、ベルベル産の馬一頭のつき15人から20人の奴隷と交換されていた。¹⁷³⁾カダモストも馬一頭あたり、奴隷15人と取引されていたことを記している。¹⁷⁴⁾またカダモストは、グラナダやチュニスで織られた絹製品がムーア人によるスーダンへの輸出商品に混じていたことを記しているし、¹⁷⁵⁾レオ・アフリカヌスも北から西アフリカへ多くの布がもたらされていたこと、ジェンネ、トンブクトゥ、ガオでは、深紅色、紫、トルコブルーの鮮かな色彩の、ベネツィア産のそれと同じ布地が流通していたこと¹⁷⁶⁾や、ボルヌー王国のガオガではエジプトから布がもたらされていたことなどを記している。¹⁷⁷⁾

また1470年に西アフリカへ旅をしたフィレンツェのベネディト・ダイが、自ら布地を売却し、トンブクトゥではロンバルディアの布地織物が取引されていたことを記している。¹⁷⁸⁾

金属類に関しては、カダモストが、銅と錫がアラブ人によってもたらされていたこと、¹⁷⁹⁾マグレ

図4 15世紀から16世紀にかけてのサハラ長距離交易ルート

(R.Mauny :Tableau géographique de l'ouest africain au moyen âge 1961 より)



ブから銀がもたらされていた¹⁸⁰⁾こと、またV・フェルナンデスは、西サハラでは銀の需要が高く、ポルトガルの西アフリカへの進出拠点となったアルギン島では金と等価格であったこと、また鉛なども、同じく西アフリカにもたらされていたことを記している。¹⁸¹⁾

カウリスに関しても、レオ・アフリカヌスはトンブクトゥで1デュカトが400個のカウリスに換算されていたことを記し、砂糖についても、スースで購入されたものが西アフリカにもたらされていたこと、またナミディーのデーツがジェンネにもたらされていたことを記している。¹⁸²⁾ソングアイ王国時代はまさにサハラ長距離交易の中世最後の輝きを放った時代であったといえよう。(図4参照)

8 中世サハラ長距離交易の終焉

さて、モロッコでは15世紀初頭より、マリーン朝が衰退期に入り、それと重なり合うようにポルトガルが1415年にセウタを占領したのに続いて、アガディールなどのモロッコの大西洋岸の主要な港町をつぎつぎに支配下におさめ、各地に商館を建て、それらを根拠にサハラ砂漠のキャラバン・ルートとの連結をはかり、西アフリカの富の吸収を企てはじめた。内紛状態が続くモロッコは急速に繁栄を失いはじめるが、やがて15世紀半ば、イスラムの神秘主義を標榜し、ポルトガルに対する反レコンキスタをかかげたベニ・シャード家が1541年にポルトガルからアガディールを奪回し、その前後にマラケシュ、フェズを攻略し、シャーディン朝をおこす。その3代王ムーライ・アブドゥラーの時代には、マリーン朝末期には一時ポルトガルの圧力のもとに廃道同然となっていたモロッコ内のサハラ砂漠のキャラバン・ルートを復活させ、西アフリカからの物資の流通を確保しようとした。シャーディン朝は、その経済的存続のためにポルトガルの植民地化を阻止することと、黒人の国との実り多い関係を復活することを同時併行的にすすめねばならなかった。¹⁸³⁾

やがて後者への働きかけは、タガザの塩山をめぐるトラブル¹⁸⁴⁾をきっかけに1591年のサハラ遠征にエスカレートし、火繩銃と騎兵で武装した大部隊は、トンブクトゥとガオを占領し、とうとうソングアイ王国を滅亡へと追い込む。このモロッコ

のソングアイ征服により、西アフリカからの金の流入が容易になり、また多くの高価な略奪品がマラケシュへ持ち帰られ、そこにはのちに、この盗賊的戦争の利益によって美しい宮殿が建てられた。¹⁸⁵⁾しかし、モロッコ人たちはニジェール湾曲部には居住せず、征服の目的に沿った新しい型の経済、社会 機構、を社会も創らなかったため、この征服による利益は涸渇するのも早かった。¹⁸⁶⁾

16世紀には地中海全域、及びアフリカ大西洋岸、ギニア湾沿岸地域に進出をはたしたポルトガルと並んで、ベネツィア、フィレンツェ、ジェノアなどのイタリア勢力も、オスマン・トルコ帝国の発展によって被った損失の埋め合わせを求めて、強力に金交易に介入していた。これは、北アフリカ沿岸のモスリム諸国が、充分な木材、金属を欠いていたため、艦隊の建造に至らず、これらの動きを阻止することが出来なかったこととも関連している。¹⁸⁷⁾15世紀以来、地中海沿岸にもたらされる「スーダンの金」はかなりの量に達し、貨幣交換の観点から見れば、まさに世界経済はアフリカの金によって支配されつつあったといってもよかった。¹⁸⁸⁾ポルトガル船は、初期には香料を積んだアラブの船を捕獲したが、やがてインドの香料、真珠の購入に「スーダンの金」を用いはじめた。¹⁸⁹⁾そのため、金は東方へはエジプト、オスマン、トルコ帝国、インド、中国へもたらされ、またイタリアの諸都市では布に金の刺繍が施され、リヨン、ジュネーブを経てパリへもたらされていた。¹⁹⁰⁾また金に伴ってアフリカからは、アラビアゴム、メレゲッタなどの香料、ダチョウの羽根、黒人奴隷などが地中海沿岸にもたらされていた。¹⁹¹⁾金をはじめとするこれらの商品を手に入れるため、商人たちはサハラ砂漠のキャラバン・ルートに銅の食器や、インド洋からもたらされた、装飾、貨幣に用いられる貝類(カウリス)、ベネツィア製のガラス玉などを導入していった。¹⁹²⁾

前述の東のキャラバン・ルートは、ポルトガルが金を直接手に入れるため、ギニア湾へと海上ルートを迂回していた時は、まだ活発に機能していた。¹⁹³⁾また西のルートには、イタリアの商人たちが関心を示し、西アフリカの交易情勢、ルート視察のため、1417年ジェノアのA・アルフォンソがトレムセンを発ち、南へ向かい、トウアトに至る。また少しおくらせてフィレンツェのベネディト・ダ

イらがトンプクトゥへ到着したのもこの頃であった。¹⁹⁴⁾

しかし、ポルトガルが西アフリカ・ギニア湾沿岸から上陸し、「スーダンの金」を直接取り引きする立場を確保してからは、この「スーダンの金」の取引の主役がイタリア商人からスペイン・ポルトガルの商人に交代し、セビリアとリスボンが、その集積地となり、「スーダンの金」を基にした大商業の中心的な役割を果たすようになる。¹⁹⁵⁾

注

- 1) Ibn-Abd-AlKaham *Conquête de l'Afrique du Nord et de l'Espagne* trad. A.Gateau Alger Carbonel 1942 P.119
- 2) Lombard, M. *L'or musulman du VII^e au XI^e siècle* *Annals E.S.C. II*(2) 1947 P.151
- 3) Al-Bekri *Description de l'Afrique septentrionale*. trad.MacGuckin de Slane, Alger, Jourdan 1913 reprinted in 1965 P.316
- 4) Ibid. P.283~284
- 5) Lewicki, T. *L'Etat nord-africain de Tāhert et ses relations avec le Soudan occidental à la fin du VIII^e et au XI^e siècle*. *Cahiers d'Etudes Africaines* No.8 P.514 *āsstīyyé*
- 6) Bovil, E.W. *The golden Trade of moor*, London 1958
- 7) Lewicki, T. 前掲論文 P.514
- 8) ibid. P.528
- 9) Al-Bekri 前掲書 PP.286~287
- 10) Al-Fazūri モロッコ、イドリス朝時代の地理学者、その著作の大部分は今日消失しているが、Al-Mas'ūdi の *Les prairies d'or*, trad. C.Barbier de Meynard. t.IV paris 1885 PP.37~40 などにより知ることが出来る。
- 11) *Chronique d'Ibn Saghir sur les imams rostēmides de Tāhert* éd.et trad.de A de C. Motylinski, *Actes du XIV^e Congrès International des Orientalistes*, paris 1908 PP.3~32
- 12) *Kitab al Buldān* auctore Ahmed abī Jakūb ibn Wādhīh al-Kātib al-Jakūbī éd.M.J.de Goeje, *Bibliotheca Geographorum Arabicorum*, t.VII 2^e éd.Leyde 1892 PP.VII~VIII (=Al-Ya'qūbī *Kitab-al-Buldān*)
- 13) Ibn Battūtah *Tuhfatu'n-Nuzzār fī Ghārā'ib il' Amsār wa Ajā'ibi'l Asfār* イブン・バトウタ『三大陸周遊記』前嶋信次訳 1977 河出書房新社 P.317
- 14) *Kitab al-Buldān* 前掲書

スペインによるアメリカ大陸の経営が本格化するにつれて、「アメリカの銀」が「スーダンの金」にとってかわり、ポルトガルを吸収したスペインのセビリアが大繁栄する時代が訪れることになる。このため、サハラ砂漠のキャラバン・ルートは、その存在理由が次第に希薄化し、中世のサハラ長距離交易は、その輝かしい歴史も終焉を迎え、一たび幕を下ろすことになる。

- 15) Al-Muhallabiの著作の断片は、*le Taqwīm-al-buldān d'Abu'l-Fida* (14世紀) に引用されている。*Géographie d'Abou-fēda* trad.M.Reinaud tII 1^{er} partie Paris 1848 PP.174~175参照
- 16) Al-Bekri 前掲書 PP.301~302
- 17) Ibn Hawqal *Kitab Sarat al-ard. Description de l'Afrique* trad.M.G de Slane paris Imp.r.Royale 1842 P.67, P.84
- 18) Al-Bekri 前掲書
- 19) Al-Bekri 同「アフリカの過去」B.Davidson 編 理論社 貫名美隆訳 1978 P.71の日本語訳より
- 20) Ad-Dargīnī, *Kitāb Tabaqāt āl-masāyih* Notice sur la chronique idadite d'ad-Dargīnī, T.Lewicki *Rocznik Orienta listyczny* t.XI P.146~172
- 21) Ibn-Hawqal 前掲書
- 22) ibid.
- 23) Lewicki, T. 前掲論文 P.532
- 24) Al-Bekri 前掲書 P.340
- 25) Ibn-Hawqal 前掲書 P.105
- 26) Lhote, H. *Sur l'emplacement de la vielle de Tademekka antique capitale des Berbères soudanais* *Notes Africaines* No.51 VII 1951 P.67
- 27) Al-Bekri 前掲書 PP.342~343
- 28) ibid. P.342
- 29) ibid PP.286~287
- 30) Ca Da Mosto *Le navigazioni atlantiche di Alvise da Cā da Mosto*, acura di R, Caddeo, Milano 1928 カダモスト「航海の記録」河島英昭訳 大航海時代叢書II 岩波書店 1967 P.556
- 31) Ibn Battūtah 前掲訳書 PP.310~311
- 32) Ca Da Mosto 前掲訳書 P.556
- 33) Mauny, R. *Tableau géographique de l'Ouest africain au moyen âge*. I.F.A.N. Dakar 1961 P.356

- 34) *ibid.* P.356
- 35) *ibid.* P.358
- 36) *ibid.* P.358
- 37) Fernandes, V. Discription de la côte d'Afrique de Ceuta au Sénégal (texte portugais edite et traduit par P.de Cenival et T.Mond) paris Larose 1938 PP.83~85
- 38) Al-Bekri 前掲書 P.322
Ibn Battūtah 前掲訳書 P.307
Ca Da Mosto 前掲訳書 PP.514~515
カダモストはタガゼートンブクトゥ間 900kmを40日行程としている。
- 39) Fernandes, V. 前掲書 P.85
- 40) Mauny, R. 前掲書 P.360
- 41) Devisse, J. Routes de Commerce et échange au Afrique occidentale en relation avec la mediterrannée.
Un essai sur le commerce africain médiéval du XI^e au XVI^e siècle Revue d'Histoire Economique et Social 1972 No.1 PP.51~52
「サハラ塩金貿易とアザライ(隊商)」前嶋信次 内陸アジア史論集第2 内陸アジア史学会編 図書刊行会 1979 PP.211~214
- 42) Davidson, B. The growth of African Civilization A History of West Africa 1000~1800 B. デビッドソン「アフリカ文明史 西アフリカの歴史」貫名美隆、宮本正興訳 理論社 1975 P.43
- 43) Lombard, M. 前掲論文 PP.143~147
- 44) Deplessy, J. La circulation des monnaies arabes en Europe occidentale du X^{III}^e au X^{IV}^e siècle Revue numismatique 1956 P.101
- 45) Lombard, M. 前掲論文 P.148
- 46) *ibid.* P.151
- 47) *ibid.* P.152
- 48) *ibid.* P.154
- 49) Deplessy, J. 前掲論文 P.105
- 50) Lombard, M. 前掲論文 PP.157~158
- 51) *ibid.* P.153, P.158
- 52) Devisse, J. 前掲論文 P.56
- 53) Lombard, M. 前掲論文 P.151
- 54) Brett, M. Ifriqiya as a market for saharan trade from the 10th to 12th Century A.D. Journal of African History X3 1969 P.347
- 55) Poncet, J. Le mythe de la catastrophe Italienne Annalese Economic Societés Civilisation XXII se p.-oct.1967 P.1102
- 56) *ibid.* P.1103
- 57) *ibid.* P.1104
- 58) *ibid.* P.1104
なお、ヒラリの来襲が、カイロワン崩壊の直接的原因であるとする主張は、イブン・ハルドゥンによってなされている。
- 59) Brett, M. 前掲論文 P.347
- 60) *ibid.* P.351
- 61) *ibid.* PP.351~352
- 62) Al-Bekri 前掲書 PP.187~188
- 63) Brett, M. 前掲論文 P.356
Ponce, J. 前掲論文 P.1107
- 64) Al-Bekri 前掲書 PP.338~343
- 65) Brett, M. 前掲論文 P.358
- 66) *ibid.* P.359
- 67) *ibid.* P.362
- 68) *ibid.* P.364
北アフリカ史に関しては、Brignon, J. etc. Histoire du Maroc paris. イブン・ハルドゥン「歴史序説」などから引用。
- 69) Davidson, B. 前掲訳書 P.54
- 70) Devisse, J. 前掲論文 P.60
- 71) *ibid.* P.68
- 72) *ibid.* P.66
- 73) *ibid.* P.67
TEGDAOUST III Recherches sur Aoudaghost Paris 1983 PP.429~441 にMalaga, Murcieで鑄造された貨幣についての説明がある。
- 74) Devisse, J. 前掲論文 P.67
- 75) *ibid.* P.72
- 76) *ibid.* P.71
- 77) *ibid.* P.71
- 78) *ibid.* P.72
- 79) Braudel, F. Monnaies et civilisations de l'or du soudan à l'argent d'amerique un drame méditerranéen Annals E.S.C. No.1 1946 PP.11~12
- 80) *ibid.* P.11
- 81) *ibid.* P.12
- 82) *ibid.* P.11
- 83) Duplessy, J. 前掲論文 P.106
- 84) Bioch, M. Le probleme de l'or au moyen âge Annals H.E.S. tV 1933 P.4
ベネツィアの通貨、及び対比率については「海の都の物語 ベネツィア共和国の二千年」塩野七生、中央公論社 1981 上巻 PP.207~208 下巻 PP.195~196に詳しい。
- 85) Davidson, B. 前掲訳書 PP.58~60
- 86) Devisse, J. Route de commerce et change en afrique occidentale en relation avec la méditerranée un essai sur le commerce afr

- icain medieval du XI^e au XVI^e siècle. Revue d'histoire Economique et Social 1972 No.2 P. 357
- 87) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.318
- 88) Ca Da Mosto 前掲訳書 PP.516
- 89) Devisse, J. 前掲論文 P.360 より引用
- 90) Bovil, E.W. The Silent trade of Wangara Journal of African History 1929 PP.27~38
川田順造「サバンナの手帖」新潮社 1981 PP.205~211にワンガラについての詳しい記述がある。
- 91) Al-Umari L'Afrique moins l'Egypte trad. M.Gaudefroy-Demonbynes paris 1927
- 92) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.318
- 93) Al-Bekri 前掲書 P.307
- 94) Mauny, R. 前掲論文 P.370
- 95) Devisse, J. 前掲論文 P.362
Ibn Battūtah 前掲訳書 P.318
- 96) Al-Umari 前掲書 P.81
- 97) Mauny, R. 前掲書 P.369
- 98) Al-Bekri 前掲書 P.301とP.329
- 99) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.318
- 100) L'African, Léon Description de l'Afrique trad. A.Epaulard. 1956 PP.472-473
- 101) Mauny, R. 前掲論文 P.380
- 102) ibid. P.368
- 103) Devisse, J. 前掲論文 P.367 Note 184
- 104) Al-Umari 前掲書 PP.66~67
- 105) L'African, Léon 前掲書 P.468
- 106) Al-Umari 前掲書 PP.75~76, P.202
- 107) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.317
- 108) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.307
- 109) Mauny, R. 前掲論文 P.368
- 110) Ibn Khaldūn Al-Muqaddima 1377「歴史序説」第1巻 森本公誠訳 岩波書店 1979 P.117
- 111) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.310
- 112) Al-Umari 前掲書 P.55
- 113) Devisse, J. 前掲論文 P.368 (注) 188 より引用
- 114) Mauny, R. 前掲論文 P.372
- 115) Mauny, R. Bracelets de verre des site anciens du Sahara nigerien Notes Africaines No.62 1954 PP.33~35
- 116) Ibn Battūtah 前掲訳書では省略 Mauny, R. 前掲論文 P.369 から引用
- 117) Duplessy, J. 前掲論文 P.119
- 118) Devisse, J. 前掲論文 P.373
- 119) ibid. P.376
- 120) Gaillard, M. Niani ancienne capitale de l'empire mandingue B.C.A.O.F. 1923 PP. 620~636
- Vidal, J. Au sujet d'emplacement de mali (ou melli) capitale de l'ancien empire mandingue B.C.A.O.F. 1923 PP.251~268 etc.
- 121) Ibn Battūta 前掲訳書 PP.307~309
- 122) Ibn-Hawqal 前掲書
Al-Bekri 前掲書 P.317
- 123) Ibn Battūtah 前掲訳書 P.309
- 124) ibid. P.310
- 125) Devisse, J. 前掲論文 P.366
- 126) Ibn Battūtah 前掲訳書 PP.318-319
- 127) Mauny, R. 前掲書 P.436 より引用
- 128) ibid. P.436
- 129) L'Africain, L. 前掲書 P.53
- 130) Lhote, H. Route antique du Sahara central L'Encyclo pédie mensuelle D'outre mer XI 1951 PP.300~305
- 131) Devisse, J. 前掲論文 P.381 より引用
- 132) ibid. P.381
- 133) Ca Da Mosto 前掲訳書 P.520
コキアとはガオのことと思われる。訳書 注(3)より 注一山口昌男
- 134) Devisse, J. 前掲論文 P.380 Note 230
- 135) Canard, M. Relations entre Merinides et Mamelouks au XIV^e siècle Annals de l'Institut d'études orientales 1941 PP.43~81
- 136) Heers, J. Le Sahara et le commerce méditerranéen à la fin de Moyen-Age. Annals de l'Institut d'études orientales 1958 PP.247~255
- 137) ibid. P.253
輸入(単位: ジェノアリラ) 輸出
バレンシアより 5800 イタリア諸地方へ 3000
セビリヤ 9100 アレキサンドリア 2900
他のスペイン 15000 ベイルート 1150
マラガ 6000 ファマゴースト 625
パレルモ 950 バルセロナ 125
不明 1150 ナポリ 125
スペイン 333
- 138) Ca Da Mosto 前掲訳書 PP.510~511
- 139) Devisse, J. 前掲論文 P.385
- 140)~144) ibid. PP.386~388
- 145) Ibn Battūtah 前掲訳書では省略 Devisse, J. 前掲論文 P.389 より引用
- 146) Al-Bekri 前掲書 PP.340~341
- 147) L'Africain, L. 前掲書 P.473
- 148) Mauny, R. 前掲論文 P.433
- 149) Devisse, J. 前掲論文 P.390 Note 291
- 150) Al-Bekri 前掲書 P.29

- 151) Mauny, R. 前掲論文 P.435 より引用
- 152) Devisse, J. 前掲論文 P.391
- 153) L'Africain, L. 前掲書 P.324
- 154) Davidson, B. 前掲訳書 P.64
- 155) ibid. P.64
- 156) Davidson, B. 前掲訳書 P.81
- 157) Devisse, J. 前掲論文 P.392
- 158) Fernandes, V. Discription de la côte d'Afrique de Ceuta au Sénégal (text portugais edite et trad. par P.Docenival et T.Monod) paris Larose 1938 P.115
- 159) Capot-Ray, R. Le sahara francais paris 1953
- 160) Fernandes, V. 前掲書 P.87
川田順造「サバンナの手帖」 P.206 にこの記述の部分訳がある。
- 161) Al-Bekri 前掲書 P.301
- 162) ibid. P.339
- 163) Fernandes, V. 前掲書 P.85
- 164) L'Africain, L. 前掲書 P.468
- 165) Mahmood, KATIéTarikh el Fettach (texte arabe accompagn d'une trad. et de notes par O.Houdas et M.Delafosse) paris Adrien-Maisonneuve 1913 reprinted in 1981 P.193
- 166) L'Africain, L. 前掲書 P.139
- 167) Ca Da Mosto 前掲訳書 P.508
L'Africain, L. 前掲書 P.140
- 168) ibid. P.414
- 169) L'Africain, L. 前掲書 P.455
- 170) Fernandes, V. 前掲書 P.87
- 171) Ca Da Mosto 前掲訳書 PP.514~517
- 172) L'Africain, L. 前掲書 P.471
- 173) Devisse, J. 前掲論文 P.367 Note 184 より引用
- 174) Ca Da Mosto 前掲訳書 P.511
- 175) ibid.
- 176)177) L'Africain, L. 前掲書 PP.464~472
- 178) Mauny, R. 前掲論文 P.370 より引用
- 179) Ca Da Mosto 前掲訳書 P.508
- 180) ibid. P.510
- 181) Fernandes, V. 前掲書 P.61
- 182) L'Africain, L. 前掲書 カウリスー P.469 砂糖 P.89 デーツ P.464
- 183) Devisse, J. 前掲論文 P.394
- 184) Es SA-DI Tarikh es-soudan (texte arabe édit et trad.par O.Houdas) paris Ardien-Maisonneuve 1911
reprinted in 1964 PP.163~164
- 185) Davidson, B. 前掲訳書 P.90
- 186) Malouwist, M. Quelques observations sur le commerce de l'or dans le Soudan occidental au moyen âge Annals E.S.C. No.6 1970 P.1632
- 187) Heers, J. 前掲論文 P.247
- 188) ibid.P.248
- 189) Braudel, F.前掲論文 P.14
- 190) Heers, J. 前掲論文 P.244
- 191)~194) ibid. PP.250~254
- 195) Braudel, F. 前掲論文 PP.15~16
(なんり しょうじ・甲南高校)